

Physician-Scientistを続けて 今思うこと

札幌医科大学医師会
札幌医科大学附属病院

なか せ ひろ し
仲瀬 裕志

Physician-Scientistという言葉、みなさんよくお聞きになりますよね。

Ganesh K先生のNat Rev Gastroenterol Hepatol (参考文献)には以下のように記されています。“Physician-scientists are uniquely positioned to bridge the gap between practising clinicians and biomedical scientists.”直訳しますと、Physician-Scientistは、臨床医と生物医学者の間のギャップを埋める立場にあります。

私は、いま札幌医科大学消化器内科学講座でPhysician-Scientistとして、臨床・教育・研究に従事している立場にいます。なぜ、自分がいまアカデミアで働いているのか？それを説明するためには、私自身の経歴を語る必要があると思います。

私は、まず医者として第一線でやっていくには、臨床なかでも救急を学ぶ必要があると考え、平成2年神戸大学医学部を卒業後に、神戸中央市民病院(現：神戸市立医療センター中央市民病院)のレジデントとして勤務を開始しました。その後も、臨床医として一般病院で研鑽をつんでいこうと、高槻病院、そして西神戸医療センターで仕事をしていくこととなります。当時は内視鏡に夢中で、内視鏡を持たない日はなかったです。西神戸医療センター在籍時は7年目の医師でバリバリの消化器医として、外来患者も数多く診察し、上部・下部・ERCPなんでもござれ、ときには血管造影までやっていました。大変でしたが、毎日、病院で働くことが楽しくて！

でも、その私がいま大学という場所で、基礎と臨床研究に取り組んでいます。

そのきっかけは、京大名誉教授千葉勉先生からの、京大大学院へこいという言葉でした。正直、大学院には、全く興味がありませんでした。しかし、当時の西神戸医療センターの小森部長から、『一度大学院で研究してこい、基礎研究は絶対臨床にも役立つからな。終わったら西神戸に戻ってくればいから』という言葉強く信じ(この願いははかなく消えていきます。人生なんてこんなもんです。絶対、思ったようにはいきません(笑))、京大大学院に進むこととなります。

京大大学院では岡崎名誉教授そして田畑教授(京大再生医科学教授)の厳しくも楽しいご指導のもと、基礎医学に専念することとなります。ここで学んだ一番重要なことは、研究における準備の大事さ、そして緻密さです。そして、常にデータを見る時に本当にそうか？という目でいつも見ることでした。Natureの論文でさえも、間違っていることがあるということも学びました。準備・緻密さというのは、臨床でも必ず必要なことなのです。みなさん、内視鏡や内視鏡治療を行う場合にも、患者さんの基礎疾患・バイタルを必ずみますよね。そう、準備200%で物事に取り組むことに、基礎と臨床との間に何も違いはありません。

医者になって、内視鏡の腕も上がって、ちょっと天狗になっていたときに、基礎医学の道に進んで、

コテンパンにされました。医師として、様々なことへの取り組みへの甘さ、それを気づくことができたのも、大学院で研究生活をおくることができたからだと思います。この経験が自分にとって本当によかったと今しみじみと感じています。もし、そういう経験がなければ、おそらく小生は思い込みの強い(診断や治療にバイアスをかけてしまう)医師になっていたかもしれません。

基礎研究はそんなにうまくはいきません。但し、一番重要なことは、「なぜうまくいかないのか？」ということについて、1つ1つ物事を検証する、この過程が重要なのです。これは、臨床においても大事なことです。医師は「なぜ、患者さんがよくなるのか？」ということを考えて治療していかねばいけません。小生の分野だと、様々な新薬ができています。昨今の若い医師の中には、病態を考えずに、いろんな薬をつかうような傾向があります。それは絶対にいけません。効かないのであれば、その理由を明確にして、そして次の治療を考えていくことが大事なのです。

臨床医学は極めてPracticalな学問ですが、その基盤となっているのは基礎医学です。「なぜ？どうして？」というClinical Questionを解決する際に、基礎医学の知識が必要なのです。だからこそ、若い先生には、一度は基礎研究の道に触れてほしいと思います。長い4年と感ずるか？短いと感ずるか？大学院に入学しても、研究結果がでないときには、「なんでこんな経験せんとかあんのや！」と感ずることもあるかもしれません。そして、「そんな経験しなくても、おれは一人前や」という方もおられるかもしれません。でも、基礎研究を経験したとしないでは、その後の医師としての物事に対しての考え方、そして進め方が大きく変わると思います。

全く、基礎研究など興味のなかった私だからこそ、みなさんに言えるのだと思います。

物事をじっくり考える時間、それを作ってほしいのです。そして、その後、研究と臨床を継続するという荊の道(いいすぎかな?)を選ぶもよし、臨床に戻ってもよいと思います。でも心に刻んでおいてほしいことがあります。みなさんが抱えているClinical Questionを解決することは患者さんの幸せにつながるということだということを。

そろそろ締めくくりたいと思います。お時間のある時に、Ganesh先生の文章を手に入れて読んでください。彼女の病院でのとっても素敵な仕事ぶりが目に浮かんできます。彼女は、最後に以下のように述べています。

“The ability to combine such responsibility with curiosity-driven scientific inquiry and the potential to positively influence many lives brings tremendous meaning and joy to the day’s work.”

この文章、本当にしびれますねえ！

この寄稿を読んでもくれた若い先生が一人でもPhysician-Scientistを目指してくれれば、こんなに嬉しいことはありません。

参考文献

Ganesh K. The joys and challenges of being a physician-scientist. Nat Rev Gastroenterol Hepatol 2021;18 (6) :365.